
エッセイ「幼稚園児の目線」

川越ふみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エッセイ「幼稚園児の目線」

【Nコード】

N8290J

【作者名】

川越ふみ

【あらすじ】

お笑いエッセイ書いてみました。

(前書き)

小説ではなく、エッセイです。

子供によつては、2、3才くらいまで母親の胎内にいた時の記憶があるという。自分はそのままでいなくなるとも、果たして一番昔の記憶は何だろうと考えてみる。昔の記憶を憶えているかを左右するのは、楽しかった、辛かったという感情よりも、単純にどれだけインパクトがあったかだけだと自分は思う。今の今まで憶えているという事は、自分の場合のその記憶も、『インパクト』それがとても強かった出来事だったのだろう・・・。

当時、幼稚園児の自分は、家族と遊園地に遊びに来ていた。ジェットコースターやバイキング、メリーゴーランドに観覧車。遊園地が大好きだった自分は、大いに楽しみ、やがて遊び疲れていった。

時刻は夕暮れ、辺りはキレイな夕焼けに染まっていた。そのオレンジ色をキツカケとするように、父、母は「そろそろ帰ろうか」と姉、妹を含めた自分達家族5人は両手に手みやげを抱え、遊園地の出口に歩みを進めていた。すると、遠くの方の会場で何やら動くもの、そして「トー!」「エイツ!」といった威勢のいい声がこだましていた。自分はその声のする方に反射的に振り向き、そしていざなわれるかのように駆け寄って行った。

そこは小さなイベント会場になっていて、舞台があり、客席もそれなりにあった。幼い自分の目に飛び込んできたのは、憧れのヒーロー達が悪者をこらしめているカッコイイ姿だった。それはいわゆる戦隊物のヒーローショーで、時間的にラストのショーだったのだろう。目の前にはテレビで観ていた大好きなヒーロー達がいる。自分は家族の事など全く忘れ、直ぐ目の前で動いている物にクギツケになっていた。

『クソー悪者め、こんな遊園地にまで悪さをしに来やがって!』
と、昔のピュアな自分はそう思っていた。

『この人達は、ちゃんと遊園地のチケットを購入し、一般の入口から入ったのだろうか』

と、今の自分はそう思うだろう。

ヒーローが悪者にパンチをくらわす！

『よし！レッド、そこだ！行け！』

と、昔のピュアな自分はそう思っていた。

『この人達は、念入りに打ち合わせをしているんだらうな。』俺ヒーロー

がお前（悪者）にこのタイミングでパンチをくらわすから、『うわ〜！』みたいなリアクションとって！』とか』

と、今の自分はそう思うだろう。

ヒーローが悪者にキックをおみまいする！

『そうだ！ブルー！いいぞ！』

と、昔のピュアな自分はそう思っていた。

『この人達は、シヨ一の合間は何をしているのだらう。意外にお弁当とか一緒に食べて、『あそこ、タイミング悪かったから、次のシヨ一はちゃんと修正していこう。あ、その卵焼き食べないならちようだい』とか話していたり』

と、今の自分はそう思うだろう。

悪者が「われわれ悪が、お前らを倒してやる！」と叫んだ。

『お前らなんかにやられるもんか！』

と、昔のピュアな自分はそう思っていた。

『この悪者は、自分で『悪』と名のつていながら、掲示板に書かれてあるシヨ一が行われる時間通りにちゃんと現れ、なぜか舞台の範囲内で悪さをしてる。真の悪なら、客席に沢山居るか弱い子供達を人質にし、ヒーローを脅迫すれば簡単に勝てそうなものなのに』

と、今の自分はそう思うだろう。

その時の純粹な自分は、ヒーローが悪者を倒してくれる事だけを信じ、心から応援していた。と、その舞台の隅で30歳くらいの男の人がマイクを片手に何やら叫んでいる姿が目に入った。自分には、その人が何をしているのかが理解出来なかった。ただ、マイクで叫

んでいる人だけしか。次第に自分は、5人のヒーローショーよりそちらの1人のマイクショーの方が気になり始めた。その人が叫んでいるのは「トー！」だの「ヤー！」だの……。『あれ？もしかして』と、ヒーローショーと照らし合わせて見てみた。するとどうだろう。実にタイミングよくヒーローとマイク男との息が合っているではないか。そこでようやく自分は理解した。『ヒーローの声は、このおっさんがやってたのか』と……。それは幼い自分にとって、とてもショッキングだった。どうせなら嘘を突き通してほしかった。それ以前に、なんでそんな思いっきり見える所でやってるんだよとも思った。ヒーローを見ながらやらないとタイミングがとれないのは分かるけど、何か見えないようにちよつとは工夫してくれても思った。

そして一気にテンションが下がった自分は、家族との夕暮れの帰り道、そのヒーローと一緒に撮ったポラロイド写真の自分の顔を見ながら、何かを悟った。

。その時の幼稚園児の自分の顔は、完全に作り笑顔だったから……。

(後書き)

くだらないエッセイをお読みいただき、ありがとうございました。
ご感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8290j/>

エッセイ「幼稚園児の目線」

2011年10月6日18時33分発行